

～すてきなあなたへ～

## 菅沼正子の映画招待席 43

### キャンディス・バーゲン

～ニュー・シネマの時代では美しすぎた～

キャンディス・バーゲンがデビュー作『グループ』(66年・シドニー・ルメット監督)で演じたのは、フランス帰りのレスビアン女性だった。

物語の舞台は、経済恐慌さなかのアメリカ。1933年に名門ヴァッサー女子大を卒業した8人が、理想と現実のはざまに苦悩する7年間を描いた内容。アメリカ映画でレスビアンの女性がそれを隠すどころか、堂々と誇示して、スクリーンに登場したのは、おそらく初めてだったと思う。

けれどそれはキャンディス・バーゲンにとっては不運であった。というのは、その直後あたりからアメリカン・ニュー・シネマの潮流が始まり、「俺たちに明日はない」「イージー・ライダー」などが古いハリウッドを押し流していったのだ。

キャンディスのあまりにも華麗に整いすぎた美貌の持ち主では、時代に合わなかったのである。イングリッド・バーグマンやグレース・ケリーといった美人女優が全盛だった40年～50年代なら、充分に威力を発揮しただろうが、美貌が邪魔するとは、時代のせい、としか言いようがない。

とはいえ、2作目の『砲艦サンパブロ』(66年)ではスティーブ・マックイーンの手役を務め、大スターの階段を上る貫禄を見せていたのも事実。しかしどうしてもニュー・シネマの壁を突き破ることはできなかった。それでも『…YOU…』(70年)や『愛の狩人』(71年)、『愛はひとり』(71年)といった作品の中で、時代を呼吸する女を進んで演じて見せてはいたのだが派手すぎる美貌が、その女のリアルな生活感をそいでしまっていた、とわたしは思っている。

そのころの作品でわたしがおもしろいと思ったのは、西部劇を現代的な視点から描いた『ソルジャー・ブルー』(70年)。騎兵隊の砦にいる婚約者に会うため辺境の地に入ったヒロイン(キャンディス)が、途中でシャイアン族に襲われ、酋長のもとで暮らすことになるが、偏見にとられない自由な考え方を持つ彼女には、インディアンが、白人のというような野蛮な民族とは思えないのだ。そして、彼らと別れ再び砦へ向かう彼女が目撃したのは、アメリカ軍騎兵隊によるシャイアン族大虐殺の光景。そのとき彼女は改めて、白人たちの武力によって滅ぼされていく先住民族の悲哀と痛恨を理解するのだ。この役がキャンディスにぴったりだったのは、彼女の知的な個性と雰囲気、演技の中にうまく生かされたからだろう。

## 良家に生まれて

1946年5月9日、キャンディスはロサンゼルスを超高級住宅地ビバリーヒルズで生まれた。父はアメリカのショービジネス世界でも高名な腹話術師、母はモデル出身の女優という華やかな環境に生まれ育ちながら、それを嫌ってスイスに留学。それはわずか14歳の時だった。帰国するとペンシルバニア大学で美術史を専攻。その頃から母親譲りの美貌は際だっていたが、それには耳も貸さず、カメラに魅せられていく。趣味の費用捻出のため、ニューヨークでアルバイトにモデルをやっているところを、シドニー・ルメット監督に見初められ、志とは違う映画の世界に身を投じることになったのである。それが冒頭でも書いたデビュー作の『グループ』だが、シドニー・ルメット監督はハリウッドと一線を画す、いわゆるニューヨーク派の監督である。

しかし、結局のところキャンディスは、ニュー・シネマ時代のアメリカ映画の水に合わないまま70年代を過ごしてしまった女優だったと、わたしには思われる。

そんな中でわたしが一番印象に残っている作品は、デビュー4作目の仏・伊合作の『パリのめぐり逢い』(67年)である。キャンディスが演じたのはキャンディスという役名でファッションモデルをやりながら、パリのソルボンヌ大学に通うアメリカ人女性。イヴ・モンタン(役名ロバート)がフランス人のTVニュースキャスター役。イヴ・モンタンはキャンディスのみずみずしい知性的美しさにひかれ恋に落ち、そこへ彼の妻(アニー・ジラルド)が絡む、苦い三角関係の物語。

しかしそれがただのメロドラマに終わらなかったのは、監督がクロード・ルルーシュ、音楽はフランス・レイのコンビ、とくれば誰もが思い出すだろう。〈ダバダバダ…ダバダバダ…ダバダバダ…〉のあのメロディー、そう世界的なヒットを飛ばした「男と女」(66年)のコンビ。ルルーシュ監督のすぐれた映像感覚のおかげ。ほとんどメーキャップなしの素顔といていいキャンディスの美貌が、独特の映像美の中でヴィヴィッドにきらめき、見る者をただただ深い恋の陶酔感の中へと引きずり込んでいったのだった。この作品は第40回(1967年)アカデミー賞外国語映画賞のノミネート作品。

## プロのカメラウーマンとして

キャンディスは大学時代からカメラに熱中し、女優になってからも「ヴォーグ」、「コスモポリタン」「ライフ」など超一流雑誌に数々の報道写真を発表して、プロのカメラウーマンとしても、一流の腕の持ち主であることを証明している。

だからガンジーの伝記映画『ガンジー』(82年)でフォト・ジャーナリストの役を演じたのは、ま

さに適役だった。適役という表現よりも、素のままのキャンディスであったといえる。キャンディスが演じたフォト・ジャーナリストは実在の人物で、マーガレット・バークニホワイト女史と言ひ、女性として初の戦場カメラマンであり、20世紀を代表するフォト・ジャーナリストなのだ。だからこそキャンディスのハマリ演技も成功したのだろう。

『ガンジー』は、イギリスに植民地支配されていたインドが、何とかその関係を断ち切ろうと立ち上がった、インド独立運動の指導者マハトマ・ガンジーの生涯を、史実に基づき忠実に描いた伝記映画。1982年・第55回アカデミー賞は11部門にノミネートされ、作品賞、監督賞(リチャード・アッテンボロー)、主演男優賞(ベン・キングズレー)の主要3部門受賞の快挙。祖国インドの大地を愛するが故に、支配者大英帝国の巨大な力に立ち向かっていった男のナマ身の姿を演じたベン・キングズレーおめでとう。

ガンジーの非暴力主義は、平和を愛する限りない人類愛からほとばしり出るもの。そして、彼の強い信念と行動力。その偉大なる魂には絶句。

その後のキャンディスはこれぞという作品には恵まれず、テレビ界に進出(1988年)していく。その勤は正しかった。低迷していたキャンディスが生き生きとしている。復活到来である。1989年から始まった『TVキャスター マーフィー・ブラウン』シリーズ。架空のテレビ局のニュースショー番組、というシチュエーション・コメディ。これが国民的番組といわれるほどの大ヒット。当然、主演の人気キャスターに扮したのがキャンディス・バーゲン。米テレビ界のアカデミー賞といわれるエミー賞で最優秀主演女優賞を5回、ゴールデングローブ賞を2回獲得している。ようやく実力が花開いたということか。そのコメディ演技が、生来の知的な個性にしっかり裏付けされていたからこそだろう。

ニュー・シネマの波の洗礼を終えた新しい映画界で、もうひと花を咲かせて欲しいものだ。

1981年、ルイ・マル監督と結婚、1児をもうけたが、1995年ルイ・マル監督ががんで死亡。しかし2000年には再婚している。

☆☆☆☆☆

**菅沼正子さんのプロフィール:** 静岡県出身、フェリス女学院短大英文科卒業後、映画雑誌『スクリーン』編集部勤務後、フリーランスの映画評論家として、旺文社、集英社、講談社の雑誌などに執筆。著書に『女と男の愛の風景』(マルジュ社)『スター55』(筑波書房、アマゾンの電子版あり)『エンドマークのあとで』(マルジュ社、アマゾンの電子版あり)。2003～2005年のNHKラジオ深夜便「菅沼正子の思い出のスクリーン・ミュージック」に出演、宇田川アナウンサーとの軽やかなやり取りが印象的でした。ミニコミ誌「すてきなあなたへ」には30号(2002年)から終刊号70号((2015年6月)まで寄稿されています。(内野光子記)